

「鳳凰堂彫刻群の性格 雲中供養菩薩像の表現と配置をめぐる問題からの考察」

佐々木 康之（慶應義塾大学大学院）

平等院鳳凰堂の彫刻群について、従来の極楽再現の阿弥陀如来像という性格だけでなく、行者や臨終者に向かう来迎の像であることを考察する。

平等院鳳凰堂は現世に極楽浄土を現じたものとして古来より語られてきたが、堂内の彫刻群も極楽浄土の教主としての阿弥陀像とそれを供養讃歎する供養菩薩像として捉えられてきた。しかし、阿弥陀如来像を含む彫刻群に見られる密教的要素などの問題もあり、全体として統一のとれた説明はなされていなかった。それに対して、近年富島義幸氏によって平安後期の阿弥陀堂の空間理念に両界曼荼羅が大きく作用したという顕密融合の視点から浄土教空間が見直され、鳳凰堂も顕密にわたる空間構成により成り立つことが一連の研究で示された。さらにその中で彫刻は来迎の像となり得ることを考えて、本群像への新たな視点を提示された。本発表も基本的考えを同じくするものだが、特に雲中供養菩薩像の造形に基づいて彫刻史的に捉え直すことにより考察を進めたい。

雲中供養菩薩像はその名称の通りに雲に乗り、自由な姿で楽器を奏するという彫刻作品中では独特なものであり、来迎図との共通性が見られる。後補の多い持物等は抜きにしても、その形勢の一致は留意される。さらにその造形を良く見れば、像が丸彫りのものと浮彫り風のものに大きく分けられることに気付く、雲の大きさや背面処理などにも差異があることが分かる。これら表現上の差異をどう考えるかはこれまで十分に議論されてこなかったと思われるが、筆者はこれこそが像の配置に関わるものであると考える。つまり堂内に参入する人物の視点を導入することで、その一点に向かって来迎すると考えることにより、上記のような像の表現上の差異が解釈可能になる。菩薩像間の造形の差異は各像の配置を定めるために重要な意味を持つのである。

このようにして彫刻群は来迎表現であることが示唆されるが、これは定印阿弥陀の来迎像の存在をも示すことになる。この点は既に富島氏による考察があるが、本発表では平安後期に編まれた各往生伝の記述等をヒントにこれを考えていきたい。結論として、月輪を納入して定印を結ぶ鳳凰堂の阿弥陀如来像に向かい密教の行をおこなうことと、来迎表現の存在は矛盾しないもので、むしろ極楽往生を期して修法をおこなう行者にとってこそ来迎像は求められたものであると考える。

本発表は平等院鳳凰堂の彫刻群をその造形より来迎表現であると捉え、定印阿弥陀と菩薩群の来迎の関係に及ぶものであるが、堂内の者に向かい来迎するという視点を中心にして、来迎図を参考にしつつ菩薩間の表現上の差異を考慮することにより、彫刻群のおおよその配置案を提出したい。本彫刻群は来迎美術の展開を考察する上でも重要な位置にあるものと考えたい。